

ADHD 児と ASD 児のいじめ体験と二次的症狀について

佐藤 正恵*

Bullying and Secondary Symptoms of Children with ADHD and ASD

Masae SATO*

*Department of Human Education, Faculty of Human Studies, Ishinomaki Senshu University,
Ishinomaki 986-8580, Japan*

1. はじめに

文部科学省はいじめを「当該児童生徒が、一定の人間関係にある者から、心理的、物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの」と定義し、「いじめか否かの判断は、いじめられた子どもの立場に立って行う」としている(平成19年)。平成24年度の小・中・高・特別支援学校におけるいじめの認知件数は、それまでで最も多い約20万件に達し(文科省, 2013), 中学3年生で被害, 加害を体験した生徒はいずれも7割を超すという報告もある(国立教育政策研究所, 2014)。従来, 子ども集団において対人トラブルは日常茶飯事であり, その中で問題解決能力や社会性が育つという積極的な考え方もあった。しかし, 近年のいじめでは度を越す攻撃が一方的に繰り返されることによって, 相手の自尊心を低下させるばかりでなく, 自殺にまで至らしめるケースが後を絶たない。子どもたちの人権と命を守るという観点から, いじめへの対策は引き続きわが国の重要な社会的課題となっている。

いじめを意味する英語は“bullying”が一般的であるが, 世界で最も早くいじめに注目した北欧圏では当初“mobbing”という訳語を当てていた(森田, 2010)。これは, もともと動物行動学や社会心理学において攻撃行動を意味する用語である。八島(2002)によれば, 攻撃には怒りを伴い, 衝動統制の未熟さと深くかかわる反応的攻撃と, 怒りを伴わず, 相手をコントロールすることを学習した結果としての道具的攻撃がある。

このうち, 反応的攻撃の方が発達の早い段階より問題になりやすいが, これは学齢期を通して徐々に減少する。この時期, 子どもは様々な認知

能力や対人関係上のルールを身につけることで, 攻撃行動が周囲からの拒否や孤立につながることを学ぶからである。その一方で, 無意識の怒りや対抗する相手を従わせたいという欲求による攻撃が始まる。これが道具的攻撃である。相手の困り感を楽しむ遊びの延長としてのからかい・いじめもあるが, これは相手への挑発となり, 不快な感情を導き出す。攻撃行動の不適切性を十分理解できない子ども, あるいは相手に対して攻撃が効果を持つと学習した子どもが自らの支配の方略として, あるいは快感を求めて道具的に攻撃するようになる。結果的に, こうした「少数派」が仲間や教師, 親を悩ますことになるという(八島, 2002)。

また, いじめの形態による分類では, Mynard & Joseph (2000) が11-16歳の生徒のデータから, 叩く, 蹴るなどの「物理的」ないじめ, 相手の物を破壊したり隠したりする「持ち物への攻撃」, 言葉による「言語的」いじめ, 仲間はずれなど「社会的な関係操作」としてのいじめの4因子を抽出した。その後 Marsh ら(2004)も, 12-18歳の生徒の調査から上記とほぼ同様の「物理的」「言語的」「社会的」という分類を行った。これらに従い, わが国の研究でも相手の身体に向けた暴力や物の破壊からなる物理的いじめ, 言葉による言語的いじめ, 相手を排除したり無視したりする関係性いじめなどに分類されることが多くなっている。

ところで, 知的障害のない自閉症スペクトラム障害(Autistic Spectrum Disorder; 以下 ASD)や, 注意欠陥多動性障害(Attention Deficit Hyperactivity Disorder; 以下 ADHD)をもつ

*石巻専修大学人間学部人間教育学科

子どもたちは、コミュニケーションや衝動統制に困難があることから対人トラブルに巻き込まれがちである。特に ASD がいじめ被害に遭いやすいという指摘は多く、多田ら（1998）は 105 例中 79 %、浅井ら（2007）は 74 例中 56 %、平岩（2009）は 34 例中 70.6 %と、いずれも高い割合を報告している。ASD 児は相手の意図や場の雰囲気を察知することが苦手であるため、日常的に周囲との行き違いが生じ、仲間から排除されやすい。いじめが繰り返されると不快な記憶を再体験するフラッシュバックや PTSD など、二次的な障害に至ることも指摘されている（杉山・原，2003；武井ら，2009）。一方、ASD 児による加害についての報告はほとんどないが、谷口（2011）は自らの相談事例から対人トラブル 10 例中 4 例が加害であり、いずれもからかいへの「仕返し」や、過去の不快な体験の想起による反動的な攻撃であったと報告している。

他方、ADHD においては一般的に衝動的であるがゆえに、加害行為が多いと考えられがちである。しかし、当事者団体である「大人の ADD & ADHD の会」（2007）による子ども時代のいじめ調査では、小・中学生の時期にいじめを受けた体験がある人は 84 %にも上り、中でも「死んだ方がまし」と思うほど深刻な体験をした人が 48 %もいた。逆に誰かをいじめた体験がある人は 46 %であり、その理由は「衝動的」「勢いあまって」などが中心であった。ADHD 児のいじめに関するわが国の実証研究は極めて少ないが、欧米ではいじめ被害、加害とも定型発達児より割合が高いことが報告されている（Kumpulainen, Räsänen & Puura 2001；Wiener & Mak, 2009 など）。

また、いじめに関与した子どもの心理状況については平岩（1999, 2009）が、小学 5 年から中学 3 年まで約 4000 人の定型発達児を対象に、いじめと抑うつとの関連を調べた。その結果、被害児、加害児とも抑うつ性が高く、一人ぼっちになりやすい、先生が自分たちをきちんと扱ってくれないと思っているなどの特徴が見出された。さらに、被害児には気分がすっきりしない、学校の印象がよくない、加害児には飲酒や喫煙の頻度が高い、頭痛や背中痛みなど不定愁訴を感じやすいという特徴も見られた。

この研究から、いじめを体験した子どもは被害側、加害側とも特有の心理状況に陥っていることが推測できる。こうした特性を知ることによって子どものいじめの早期発見や、その心理的負荷の程度を理解しうる可能性がある。しかし、被害や加害に関与した発達障害児の心理特性に関する研究は、事例的な指摘以外ほとんど見当たらないのが現状である。また、発達障害児がいじめの発生にどのように関与しているか検討することは、対人トラブルの深刻化を防ぐための配慮や対策を明らかにする上で重要である。

そこで本研究は、ASD と ADHD をもつ小中学生の保護者への質問紙調査から、彼らのいじめ被害および加害の実態と、被害や加害を経験した際の二次的な心身症状について明らかにすることを目的とする。子どもの心身症状については、小児科診療における心理社会的問題のスクリーニング検査としてアメリカで開発された Pediatric Symptom Checklist（以下 PSC 尺度）を用いる。これは、石崎ら（1997, 2000）によって日本語版が作成されており、計 35 項目の質問に保護者が回答するものである。わが国の心身疾患児を含む調査によって、尺度の妥当性と信頼性が確認されている。

2. 方法

(1) 対象

2007 年 6 月から 2011 年 3 月までの 4 年間に、A 県立 B 病院小児科に来院した子どもの保護者のうち、ADHD もしくは ASD（アスペルガー障害、高機能自閉症、知的障害のない特定不能の広汎性発達障害）と診断された小学生、中学生をもつ者を対象とした。保護者には、子どもの受診の待ち時間に本研究の趣旨と概要、個人情報に関する倫理的配慮等について文書と口頭で説明した。その上で研究協力への同意が得られた保護者に、その場で質問紙に記入してもらい、回収した。

(2) 質問紙の構成

質問紙の内容は、以下の①～③である。

①いじめ被害および加害体験の有無：被害のみ、加害のみ、被害と加害の両方、いじめ体験なしの 4 つの選択肢のうち該当するものを選んでもらった。なお、その際、いじめの定義については本論

冒頭で示した文部科学省（平成 19 年）のものを提示した。

②いじめ被害および加害の内容：自由記述を求めた。

③PSC 尺度：PSC 尺度日本語版（石崎ら，2000）の 35 項目に，トラウマを受けた子どもに多いとされるフラッシュバックに関する質問（「過去の嫌な体験を思い出し，パニックになる」）を加え，計 36 項目からなる尺度を作成した（表 1）。各項目ごとに「全くない」「時々ある」「しばしばある」の 3 件法で回答を求めた。

データの統計的分析には IBM SPSS Statistics 20 を用いた。

3. 結果

(1) 子どもの属性

ADHD 児の保護者 91 名，ASD 児の保護者 53 名から回答が得られた。表 2 に子どもの性別および学校種別人数を示す。性別は，ADHD では 85 名（93%），ASD では 45 名（85%）が男子であった。学校種別は，ADHD では 68 名（75%），ASD では 37 名（70%）が小学生であった。

(2) ADHD と ASD におけるいじめ体験の割合

表 3 に被害のみ体験した群（以下被害群），加害のみ体験した群（加害群），被害と加害の両方

を体験した群（両方群），いじめの体験がない群（なし群）ごとに人数を示す。ADHD では「加害群」22 名（24%），「両方群」15 名（17%），「被害群」14 名（15%）と，全体の 56%がいじめに関与していた。ASD では「両方群」が 22 名（42%），「被害群」14 名（26%），「加害群」なしで，全体の 68%が関与していた。

(3) いじめの内容

被害の内容は「被害群」と「両方群」，加害の内容は「加害群」と「両方群」の保護者の記述を分析した。また，先行研究に従い，身体や物に関連する「物理的」いじめ，言葉による「言語的」いじめ，仲間はずれや無視など「関係性」いじめの 3 つに分類した。表 4，5 に ADHD 児，表 6，7 に ASD 児の被害加害の内容をまとめた。

1) ADHD について

①被害の内容

表 8 に被害件数を示す。ADHD では合計 63 件で，そのうち物理的いじめが 34 件あった。物理的いじめのうち身体に関連した攻撃は 24 件で，蹴られる，叩かれる，雪を投げられるなど比較的単純な攻撃が 14 件と半数以上を占めた（表 4）。その他に，いつも雪合戦の標的にされる，ズボン而降ろされる，下校中ランドセルを持たされる，指をハサミで切られるなど仲間からの攻撃に加

表 1 PSC 尺度日本語版

1. 何らかの体の痛みを訴える	13. 希望がないように見える	25. 必要がないのに危険なことをする
2. 一人で過ごすことが多い	14. 一つのことに集中できない	26. よくケガをする
3. 疲れやすい，あまり元気がない	15. 友達と遊びながらない	27. あまり楽しそうに見えない
4. そわそわしてじっと座ってられない	16. 他の子どもたちとけんかをする	28. 自分の年齢よりも幼稚にふるまう
5. 先生とトラブルがある	17. 学校を休む	29. 規則を守らない
6. 学校にあまり興味がでない	18. 学校の成績が悪くなっている	30. 気持ちを表さない
7. まるでモーターで駆り立てられるようにふるまう	19. 自分を卑下する	31. 他の人の気持ちを理解しない
8. 空想にふけることが多い	20. 診察してもらってもどこも悪くないと言われる	32. 他人をからかう
9. 気が散りやすい	21. よく眠れない	33. 都合の悪いことを人のせいにする
10. 新しい状況をこわがる	22. 心配性である	34. 他人の物を取る
11. 悲しい，幸せでないと思う	23. 以前と比べ親と一緒にいたがる	35. 物を分け合うのをいやがる
12. いらいらしたり，怒ったりする	24. 自分は悪い子だと思っている	36. 過去の嫌な体験を思い出し，パニックになる

※36 番目は今回付け加えた質問

表 2 子どもの人数

	ADHD (N=91)		ASD (N=53)	
	男子	女子	男子	女子
小学生	66	2	30	7
中学生	19	4	15	1
合計	85	6	45	8

表 3 いじめを経験した人数

	被害群	加害群	両方群	なし群	合計
ADHD (%)	14 (15)	22 (24)	15 (17)	40 (44)	91 (100)
ASD (%)	14 (26)	0 (0)	22 (42)	17 (32)	53 (100)

え、担任から参観日に土下座を強いられたという体罰もあった。物に関連した攻撃は 10 件で、持ち物を取られる、隠される、壊される、ランドセルに葉っぱや雪、腐った玉ねぎを入れられる、給食の配膳を拒否されたり、教材を回してもらえないなどであった。

言語的ないじめは 15 件で、からかいの他、授業中の発言に対し「言ってる意味がわからない」と揶揄される、「そんな問題もできないなんて、バカじゃない」と非難される、友達のファイルを自分の鞆に入れられ「盗んだ」と中傷されるなどがあった。また、担任から「また〇〇ちゃんか」という心無い言葉を言われたという記述もあった。関係性いじめは 14 件で、仲間外れがほとんどであった。

②加害の内容

表 9 に示したように、加害に関する記述は合計 37 件あった。このうち仕返しと判断できる加害が 19 件と半数を占めた。内容は叩く、パンチをする、物を投げるなど身体的攻撃の他、悪口を言い返すという言語的攻撃であった（表 5）。

仕返し以外の攻撃 18 件のうち 13 件は、注意された上級生を叩く、ふざけていた友達にいきなりパンチをする、遊んでいるうちにけんかになったり、制御できなくなったりして暴力を振るう、休み時間の出来事を後になって怒り出し相手を殴るなどの衝動的な攻撃の他、リレーに負けたのは足の遅い友達のせいだと決めつけ腹部を殴る、自分がよく思われていないと勘違いして相手を殴るなどの認知的な問題による暴力であった。言語的いじめと関係性のいじめはそれぞれ 2 件と少なかった。関係性では他児に主導され、友達を仲間外れにするというものであった。

2) ASD について

①被害の内容

総数は 75 件であった（表 8）。物理的ないじめが 41 件と半数以上を占めた。内容を見ると（表 6）、蹴られる、押される、ひっかかれるなど単純な身体攻撃は 5 件と少なく、下校中ランドセルをずっと持たされる、足を出して倒される、やめてと言っても暴力をやめてもらえない、修正テープで身体をぐるぐる巻きにされる、椅子を引き、尻もちをつかされる、意味もなく土下座させられ

る、カバンの紐で首を絞められる、複数のクラスメートにズボンを下ろされマスターベーションを強いられる、服を破られる、USB のデーターが消される、ゲーム機を 2 階から落とされ壊される、持ち物をトイレに捨てられるなど、いじめの意図性が明確な身体攻撃や物への攻撃が多かった。また、お金の恐喝もあった。

言語的いじめは 26 件で、「バカ」や「のろま」「スベ」「キモイ」などの悪口を言われる以外に、「バイ菌」や「ごみ山残飯」「幽霊」というあだ名をつけられる、言葉や手指の暗喩によって死ねと言われる、「交通事故に遭って死にました」という揶揄、無理難題を言って喜ぶというものなどがあった。関係性のいじめは 8 件で、仲間外れと無視であった。

②加害の内容

総数は 23 件で（表 9）、このうち 10 件が仕返しとしての加害であった。内容は叩く、殴るなど全て身体的攻撃であった（表 7）。

仕返し以外の攻撃 13 件のうち 8 件は、注意されて叩く、かみつくといった衝動的な暴力で、決まりを守らなかった友達を後ろからはがいじめにする、注意しても応じなかった年下の子どもを叩く、声がうるさい生徒の背中を何も言わずシャープペンシルで刺すなど、規則へのこだわりや感覚の過敏性が関与している行動もあった。言語的攻撃の 3 件は相手へのからかいであり、ストレートな言葉で傷つけたというものも含まれていた。関係性のいじめ 2 件は、自分より行動が遅い子どもや年下の女子に対する仲間外れであった。

(4) PSC 尺度の結果

①ADHD について

PSC 尺度の得点に「被害群」「加害群」「両方群」「なし群」で差があるかどうか検討するため、各項目ごとに平均値の一元配置分散分析を実施した。多重比較は等分散が認められた場合 Bonferroni 法、認められなかった場合 Tamhane 法によった。有意差があった項目を表 10 に示す。

「被害群」で有意に高かったのは「友達と遊ばたがらない」（加害群、両方群との有意水準 $p < .05$ ）、「学校を休む」（加害群 $p < .001$ 、両方群 $p < .05$ 、なし群 $p < .01$ ）、「自分を卑下する」（なし

佐藤 正恵

表 4 ADHD の被害の内容（複数回答あり）

物理的 34 件	言語的 15 件	関係性 14 件
【身体に関連した攻撃】 [24] 蹴られた (7)/たたかれた (5)/雪を投げられた (2)/耳を引っぱられた/乱暴された/人のいないところで殴られた/石を投げられた/背中/ランドセルを蹴られ、倒された/雪合戦の時にいつも標的にされた/下校中、複数の子どものランドセルを持たされた/指をハサミで切られた/ズボンを下げられた/学級担任から参観日に 10 回くらい土下座でお詫びをさせられた 【物に関連した攻撃】 [10] 持ち物を取られた/ドリルを投げられた/文房具を隠された/ランドセルの中に雪を入れられた/ランドセルに葉っぱや草を入れられた/下校時にランドセルや手提げ袋に雪を入れられた/下校中、ランドセルに腐った玉ねぎを入れられた/鞆を取られ、壊された/給食の配膳をしてもらえなかった/配られた教材を回してもらえなかった	からかわれた (5)/「バカ」と言われた (2)/授業中発言する度に「言ってる意味がわからない」と揶揄された/「先生に答えを教えてもらっている」と何回も言われた/勉強で間違えると「そんな問題もできないなんてバカじゃない」と言われた/「キモイ」と言われた/「汚い」と言われた/友達のカバンを鞆に入れられ「盗んだ」と言われた/クラスメートにバカとか嫌なことを言われるのはしょっちゅう/担任にまたあの子か、という雰囲気です「また○○ちゃんか」と言われることが何回もあった	仲間はずれにされた (10)/部活で仲間はずれにされた/一緒に遊んでくれなかった (2)/遊ぶ時、いつも鬼にされた

※ [] は合計件数、() は複数あった場合の件数

表 5 ADHD の加害の内容（複数回答あり）

物理的 28 件	言語的 7 件	関係性 2 件
【身体に関連した攻撃】 仕返し [13] : 嫌なことを言われたので叩いた (3)/嫌なことをされたので叩いた (2)/追いかけられたので叩いた/からかわれた相手を叩いた/女子に「キモイ」と言われ、手を出した/嫌なことを言われ鉄棒から引きずり落とした/相手に言われた一言にカチンときて顔をパンチした/悪口を言われカッとなり乱暴した/自分の物を取られ、頭にきてハサミを投げた/仲間はずれにされたので棒で叩いた 仕返し以外 [13] : 注意した上級生を叩いた/同級生の袖に泥をかけた/係りの仕事で物を配っている時、相手に投げてしまい怪我をさせた/一緒に遊びたくてもうまく伝わらず、ちょっかいを出してしまった/ふざけていた友達にいきなりパンチをした/休み時間ボールが当たったことを後で怒りだし、投げた相手を殴った/リレーで負けたのは足の遅い子のせいだと言って、その子のお腹をパンチした/野外活動のとき自分が変だと思われていると勘違いしたらしく、叩く、蹴るなどの暴力をふるった/遊んでいるうちに制御できなくなり、相手を押して転倒させた/ゲームをして遊んでいた途中でけんかになり、殴ったり蹴ったりした/友達と意見が合わず、蹴った/下校中に友達とふざけているうちに傘で友達を叩いた/急に女の子に抱きつき、その子が倒れて頭を打った 【物に関連した攻撃】 仕返し [1] : 持ち物を隠されたので、相手の持ち物も隠した 仕返し以外 [1] : いつも注意してくる子どもの鞆を隠した	仕返し [5] : 嫌なことをされたり、言われたりしたので悪口を言った (5) 仕返し以外 [2] : ふだんから「バカ」「死ね」という言葉を口癖のように使っていたが、他児に向け言ってしまい傷つけた/相手に大きな声でストレーナ話した方をしてしまい傷つけた	仕返し以外 [2] : 他児と一緒に個人を仲間はずれにした/他の友達と一緒に体育館の用具室に友達を閉じ込めた

※ [] は合計件数、() は複数あった場合の件数

表 6 ASD の被害の内容（複数回答あり）

物理的 41 件	言語的 26 件	関係性 8 件
【身体に関連した攻撃】 [21] 蹴られた (2)/下校中他児のランドセルや持ち物などをずっと持たされた (2)/ズボンを下された (2)/押された/かみつかれた/ひっかかれた/つばをかけられた/足を出して倒された/遊具から引きずり下された/物をぶつけられた/背中に草を入れられた/「やめて」と言っても叩いたり蹴ったりするのをやめてくれなかった/水筒を取り上げられ、頭にぶつけられた/下校中修正テープで身体をぐるぐる巻きにされた/椅子を後ろに引き、尻もちをつかされた/カバンの紐で首を絞められた/下校中に意味もなく土下座させられた/ズボンを下ろされマスターベーションを強いられた 【物に関連した攻撃】 [20] 物を隠された (7)/物を取られた (2)/メガネを取られた/ノートやシャープペンシルを壊された/服を破られた/靴を踏まれた/ゲーム機を 2 階の窓から落とされ、壊された/USB のデータを消された/机の中の持ち物をトイレに捨てられた/消しゴムを細かくちぎられ、使えないようにされた/触れた物を汚いもの扱いするように手や息で払われた/お金を要求された/お金を恐喝された	嫌なことを言われた (6)/からかわれた (4)/バイ菌と呼ばれた (2)/「スベ」と言ってからかわれた (2)/指を使った隠喩で「死ね」と指示された (2)/下校中「死ね」と言われた/「キモイ」と言われた/「バカ」「のろま」などの悪口を言われた/「遅い」「とろい」と言われた/「うざい」と言われた/「お前の家は貧乏だ。万引きして生活している」と言われた/「ごみ山残飯」というあだ名をつけられた/「幽霊」とか「(あなたは) 交通事故に遭って死にました」とか言われた/なじられた/複数で無理難題を言って困るのを喜んでいた	仲間はずれにされた (6)/無視された (2)

※ [] は合計件数、() は複数あった場合の件数

ADHD 児と ASD 児のいじめ体験と二次的症狀について

表 7 ASD の加害の内容 (複数回答あり)

物理的 18 件	言語的 3 件	関係性 2 件
【身体に関連した攻撃】 仕返し [10]: からかわれたことに怒って叩いた/悪口を言われ、石を投げた/いろいろ欠点を言われ、相手を叩いた/女子の冷やかしやからかいに我慢できず叩いた/からかわれたり相手に嫌なことを言われた時、暴力をふるった/からかいに腹を立て、カッとなってけがをさせた/相手にバカにされ、カッとなって殴った/からかわれた時、思うように自分の気持ちを表せず友達に乱暴した/病院受診のため学校を休んだら「ずる休みをした」と言われ、殴ってしまった/嫌なことを言われ、口で言い返せずに叩いた 仕返し以外 [8]: 先生が他の子をほめていて「どうせ俺はできない」と言って、その子を叩いた/決まりを守らなかった友達をはかいじめにした/年下の子どもに注意しても応じなかったため、髪の毛を引っばった/声がうるさい友達を文具で突いた/注意され、カッとなって腕にかみついた/掃除の時間にうろうろしていたところを上級生に注意され、かみついた/本当は遊びたかったのだが、うまく言えず手を出してしまった/遊びからエスカレートし、相手に馬乗りになって押さえつけた	ストレートな言い方で相手をからかった/加減のない言い方をし、相手を傷つけた/年下の子をからかった	自分より行動が遅い子を他児と一緒に仲間はずれにした/通学途中に年下の女子に「おまえは来るな」と言って仲間はずれにした

※ [] は合計件数

表 8 いじめ被害の種類別件数 (複数回答あり)

	物理的		言語的	関係性	合計
	身体	物			
ADHD (%)	24 (38)	10 (16)	15 (24)	14 (22)	63 (100)
ASD (%)	21 (28)	20 (27)	26 (35)	8 (11)	75 (100)

表 9 いじめ加害の種類別件数 (複数回答あり)

	仕返し				仕返し以外			合計	
	物理的		言語的	関係性	物理的		言語的		関係性
	身体	物			身体	物			
ADHD (%)	13 (38)	1 (14)	5 (14)	0 (0)	13 (38)	1 (14)	2 (5)	2 (5)	37 (100)
ASD (%)	10 (43)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	8 (34)	0 (0)	3 (14)	2 (9)	23 (100)

群 $p < .05$), 「診察してもらってもどこも悪くないと言われる」(加害群 $p < .05$), 「よく眠れない」(両方群 $p < .05$, なし群 $p < .01$) であった。

「加害群」では「気が散りやすい」(被害群 $p < .05$), 「他の子どもたちとけんかをする」(被害群, なし群 $p < .05$), 「自分を卑下する」(なし群 $p < .05$), 「規則を守らない」(被害群 $p < .05$), 「物を分け合うのをいやがる」(被害群 $p < .05$) が高かった。

「両方群」で高かったのは「希望がないように見える」であった(加害群, なし群 $p < .05$)。

②ASD について

「被害群」「両方群」「なし群」の 3 群で一元配置分散分析を実施した。有意差があった項目を表 11 に示す。

「被害群」で高かったのは「希望がないように見える」(なし群との有意水準 $p < .01$), 「自分を卑下する」(なし群 $p < .05$), 「過去の嫌なことを思い出してパニックになる」(両方群 $p < .05$, なし群 $p < .01$) であった。

「両方群」では「先生とトラブルがある」(なし群 $p < .05$), 「いらいらしたり、怒ったりする」

表 10 ADHD の PSC 尺度の一元配置分散分析結果 (有意差があった項目)

項目	平均値				F 値	多重比較
	被害群	加害群	両方群	なし群		
9. 気が散りやすい	0.71	1.44	0.93	1.20	4.04*	加害>被害
13. 希望がないように見える	0.57	0.36	0.93	0.37	3.42*	両方>加害, なし
15. 友達と遊びたがらない	0.80	0.27	0.29	0.33	3.21*	被害>加害, 両方
16. 他の子どもたちとけんかをする	0.77	2.07	0.87	0.75	4.90**	加害>被害, なし
17. 学校を休む	0.93	0.04	0.27	0.25	9.18***	被害>加害, 両方, なし
19. 自分を卑下する	1.28	1.28	1.25	0.13	8.30**	被害, 加害, 両方>なし
20. 診察してもらってもどこも悪くないと言われる	0.43	0	0.20	0.15	2.74*	被害>加害
21. よく眠れない	0.93	0.45	0.33	0.25	4.88**	被害>両方, なし
29. 規則を守らない	0.50	1.09	0.93	0.75	2.70*	加害>被害
35. 物を分け合うのをいやがる	0.21	0.73	0.40	0.45	2.72*	加害>被害

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表 11 ASD の PSC 尺度の一元配置分散分析結果（有意差があった項目）

項目	平均値			F 値	多重比較
	被害群	両方群	なし群		
5. 先生とトラブルがある	0.38	0.64	0.06	4.98*	両方>なし
12. いらいらしたり、怒ったりする	1.28	1.55	0.76	6.92**	両方>なし
13. 希望がないように見える	0.95	0.50	0.29	6.21**	被害>なし
15. 友達と遊びたがらない	0.59	1.21	0.53	4.24*	両方>被害、なし
16. 他の子どもたちとけんかをする	0.43	0.86	0.29	5.58**	両方>なし
19. 自分を卑下する	1.07	1.04	0.53	3.32*	被害、両方>なし
32. 他の人をからかう	0.14	0.86	0.70	4.84*	両方>被害
33. 都合の悪いことを人のせいにする	0.50	1.27	1.10	4.84*	両方>被害
36. 過去の嫌なことを思い出し、パニックになる	0.93	0.36	0.18	5.67**	被害>両方、なし

*p<.05 **p<.01

（なし群 $p<.01$ ）、「友達と遊びたがらない」（被害群、なし群 $p<.05$ ）、「他の子どもたちとけんかをする」（なし群 $p<.05$ ）、「自分を卑下する」（なし群 $p<.05$ ）、「他の人をからかう」（被害群 $p<.05$ ）、「都合の悪いことを人のせいにする」（被害群 $p<.05$ ）が高かった。

4. 考察

(1) ADHD 児の特徴

①いじめの内容

ADHD では約 6 割、ASD では約 7 割の子どもたちが何らかのいじめに関与していた。保護者からは、いじめについて本人に聞くと嫌がるので正確には把握していない、またいじめられるのは日常茶飯事なので書ききれないという記述もあった。このことから、実際の件数はもっと多い可能性がある。

障害種別に見ると ADHD 児の場合、被害では叩かれる、蹴られるという比較的単純な暴力が少なくなかった。今回の研究では、これらがいかなる文脈で生じたのかわかりにくい、不注意や衝動性ゆえに相手の怒りを導き、反動的に叩かれたり蹴られた、あるいは互いに攻撃し合った結果である可能性もある。その一方、いつも雪合戦の標的にされる、下校中複数の子どものランドセルを持たされる、ランドセルに嫌なものを入れられる、物を隠される、給食の配膳をしてもらえない、配られた教材を回してもらえないなど、嫌がらせの意図が明確な道具的攻撃の対象にもなっていた。

また、「言ってる意味がわからない」、「そんな

問題もできないなんて、バカじゃない」という揶揄や「いつも先生に答えを教えてもらっている」という非難など、学業に関連する言語的攻撃を受けているのも特徴であった。ASD では概ね学業に問題はなく、むしろ特定の領域で秀でた能力を発揮する子どももいるのに対し、ADHD では集中力の問題により学業全般に支障が生じやすい。こうした障害特性の違いが、言語的攻撃の内容に反映されたものと推測される。

他方、加害では仕返しが約半数を占め、その内容は叩く、殴るなどの暴力的な反撃や言葉による反撃がほとんどであった。また仕返し以外の加害は、遊んでいて腹が立ったり、意見が合わなくなり突然叩くなどで、これらは衝動統制の問題を背景とした反応的攻撃と判断される。その他に勘違いや思い込みなど認知や思考の未熟さを背景とした反動的な加害もあった。

②PSC 尺度

加害群では気が散りやすい、他の子どもたちとけんかをする、規則を守らない、物を分け合うのを嫌がるという特徴が示された。これらは主に加害を及ぼしがちな ADHD 児の日常的な行動特性として理解できる。また、自分を卑下するという特徴も示され、自尊心の低さが示唆された。これには、乱暴な振る舞いゆえに周囲から叱責や拒否を受けやすいことが影響しているのではないかと考えられた。

一方、被害群では友達と遊びたがらない、学校を休む、自分を卑下する、診察してもらってもどこも悪いところはないと言われる、よく眠れないなどの特徴が見られた。いつも関わり続けなければ

ばならない身近な仲間から、上で見てきたような攻撃に日常的に晒されることは、こうした回避的、心身症的な症狀をもたらすものと推測される。また、被害と加害の両方を体験した群では、希望がないように見えるという特徴が示された。被加害の両方の立場に立つことで、「加害者が悪い」と批判するわけにもいかない複雑なネガティブな感情を体験することになり、それがこうした抑うつ的な症狀に反映されたのかもしれない。

(2) ASD 児の特徴

①いじめの内容

ASD の被害では、叩かれる、蹴られるといった比較的単純な攻撃よりも、暴力をやめてもらえない、首を絞められる、大切な USB のデータやゲーム機を破壊される、複数のクラスメートにズボンを下ろされマスターベーションを強いられる、暗喩も用いて死ねと言われる、人格を否定するようなあだ名で呼ばれる、金銭を恐喝されるなど、暴力による支配や嫌がらせの意図が明確な激しい道具的攻撃が多かった。ASD 児は社会性の障害ゆえに社会適応はより困難であるが、特に規範意識の乏しい集団の中では執拗なからかいや攻撃の対象になりやすいと推測される。アスペルガー障害をもつ成人による自伝でも、いじめられた体験が赤裸々に綴られている（森口、2000 など）が、本研究でも ASD 児が深刻ないじめの対象となっていることを確認する結果となった。

一方、加害では ADHD と同様、仕返しが半数あり、その内容は叩くなどの暴力による反撃がほとんどであった。仕返し以外では、規則を守らない者や注意に応じなかった者、声がうるさい者に暴力を振るう、ストレートな言い方で相手を傷つけるといった攻撃が目立った。これらの背景には規則などへのこだわりが強く判断の保留ができない、周囲からの音声などに独特な不快感覚があり、それに耐えられない、仲間とよりよい関係を築く意図やスキルに乏しいなど、ASD の障害特性固有の問題があると考えられた。

②PSC 尺度

被害群では希望がないように見える、自分を卑下する、過去の嫌なことを思い出しパニックになるという特徴が示された。上記のような激しい道具的攻撃は、その理由や意図がとりわけ理解しづ

らい ASD 児にとっては強い迫害体験となり、恐怖や不安、人間に対する不信など深い心理的苦痛を生む。こうしたことが、希望が持てないという抑うつ感や自尊心の低下、PTSD の一症状であるフラッシュバックなどの二次的症狀に反映されたものと推測される。

また、被加害の両方を体験した群では先生とトラブルがある、イライラしたり怒ったりする、他の子どもたちとけんかをする、他の人をからかう、都合の悪いことを人のせいにするという攻撃的な特徴が目立った。またそれと同時に、友達と遊びたがらない、自分を卑下するという回避的で自尊心の低い心理特性も示された。フィンランドにおける 14-16 歳の定型発達児のいじめと精神保健上の諸問題の関係についての調査では、いじめの被害と加害の両方を体験した群は、被害群や加害群より抑うつや不安感が高いと報告されている（Kaltiala-Heino ら、2000）。対象児の特性や年齢が異なるため、本研究と直接比較することはできないが、被加害の両方を体験する発達障害児は少なくないと思われ、いじめからの保護や適切な指導の重要性が理解できよう。

(3) 求められる配慮・対策

いじめの本質的な特性を「相手を威力によってコントロールしようとする道具的攻撃」と見た場合、今回の小中学生段階の ADHD 児、ASD 児とも道具的攻撃の対象にはなりやすいものの、道具的な加害を及ぼしていることは少なかった。これは谷口（2011）の指摘とも一致する。文部科学省によるいじめの認定は被害者意識を重視したものとなっているが、特に加害児に効果的な指導を行う上では、道具性を持つ攻撃と反応的な攻撃を区別することが重要であろう。

障害種別では、ADHD においては衝動性の問題から加害に及んでいる場合が多かったことから、衝動統制が第一の課題と考えられる。これには薬物療法やソーシャルスキル・トレーニングなどによって、幼少期から衝動をコントロールし、適切な対人能力を育てることが効果的と思われる。また、谷口（2011）によれば、ADHD では幼少期の厳しい叱責や保護者による不適切な養育環境から、承認欲求として加害行動を示す場合もあるという。今回研究に協力してくれたのはいず

れも子どもの障害を理解し、医学的治療を続けている意識の高い保護者であった。そのためか、こうしたタイプの加害は見当たらなかったが、臨床的には留意すべき視点である。ADHD 児が自尊感情を高めることができるような配慮と、幼少期からの保護者支援が必要である。

他方、激しい道具的攻撃の対象になりやすい ASD 児の対人トラブルを予防するには、まず周囲が ASD の障害特性を理解することが重要であると考えられる。本人の独特なこだわりや知覚、考え方を理解することにより、不要な軋轢を減らせる可能性がある。その際、谷口（2011）も指摘するように、障害の開示が効果をもつ場合もあるが、それは本人の利益を第一としたものとし、周囲の子どもの発達段階や保護者の意思も十分理解した上で慎重に実施すべきである。また、いじめの解消に時間がかかりそうな場合、本人が加害児から距離を取れるよう支援すると同時に、加害児の保護者と連携した対応も必要となろう。

また、今回の保護者によるいじめ記述の中には、担任からの配慮に欠ける言動も含まれていた。こうした言動や態度が、子どもたちの発達障害児への否定的感情や差別的対応を生む可能性は否めない。逆に学校やクラスに規範意識があり、担任の配慮に基づく見守りが適切に機能している場合、発達障害児へのいじめを防ぐことができるという事例報告もある（稲富，2013；今津，2013 など）。子ども同士の関係性を促すためには、子どもが信頼できる大人の存在が必要不可欠であり、教師や保護者、地域の大人の連携した指導の重要性も確認しておきたい。

今回、特に女兒の対象が少なかったことから、定型発達児で指摘されている被加害の内容の性差や、性差を踏まえたいじめの発達の变化（八島，2002）の確認までは行えなかった。いじめの環境要因の検討も含め課題は多く、さらなる実証的、実践的研究の蓄積が望まれる。

謝辞

本研究にご協力賜りました保護者の皆様に厚く御礼申し上げますとともに、お子様方の今後のさらなるご成長をご祈念申し上げます。

文献

- 浅井朋子・杉山登志郎・小石誠二・並木典子（2007）：高機能広汎性発達障害の不応行動に影響を及ぼす要因についての検討。小児の精神と神経，47，（2），77-87。
- 平岩幹男（1999）：アンケート調査による小中学生におけるいじめの実態調査と精神保健学的検討。東京女子医科大学雑誌，69（9・10），616-636。
- 平岩幹男（2009）：いじめの背景に見えてくるもの，実際の相談を含めて。日本小児科学会雑誌，113（12），146-149。
- 平岩幹男（2011）：発達障害といじめ。現代のエスプリ 2011，8（529号），149-158。
- 石崎優子・深井善光・小林陽之助（1997）：米国マサチューセッツ総合病院 Jellinek らの開発した Pediatric Symptom Checklist の日本語版の作成－小児心身症早期発見のために。日本小児科学会誌，101，1679-1685。
- 石崎優子・深井善光・小林陽之助・小澤亨司（2000）：Pediatric Symptom Checklist 日本語版のカットオフ値。日本小児科学会誌，104，831-840。
- 今津孝次郎（2013）：いじめ認識の弱点を乗り越える。教育と医学，11，4-11。
- 稲富恵子（2013）：発達障害といじめ：いじめを予防できる環境。教育と医学，11，28-37。
- 国立教育政策研究所（2014）：いじめ追跡調査 2010-2012 いじめ Q&A。
- Kaltiala-Heino,R., Rimelä,M., Rantanen,P., & Rinmpelä,A. (2000): Bullying at school—an indicator of adolescents at risk for mental disorders. *Journal of Adolescence*, 23, 661-674.
- Kumpulainen,K., Räsänen,E., & Puura,K. (2001): Psychiatric disorders and the use of mental health services among children involved in bullying. *Aggressive Behavior*, 27, 102-110.
- Marsh,H.W., Parada,R.H., Craven,R.G., & Finger, L. (2004): In the looking glass: A reciprocal effects model elucidating the complex nature of bullying. In C.E.Sanders & G.D.Phye (Eds.) *Bullying*.San Diego: Elsevier Academic Press. Pp.63-106.
- 森口奈緒美（2000）：変光星。飛鳥新社。
- 森田洋司（2010）：いじめとは何か。中央新書。
- Mynard,H., & Joseph,S. (2000): Development of the Multidimensional peer-victimization scale. *Aggressive Behavior*, 26, 169-178。

ADHD 児と ASD 児のいじめ体験と二次的症狀について

- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課（2013）平成 24 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について（http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/03/icsFiles/afieldfile/2014/03/31/1345890_02.pdf）
- 大人の ADD & ADHD の会（2007）：いじめに関するシンポジウム資料.
- 杉山登志郎・原仁（2004）：特別支援教育のための精神・神経医学. 学研.
- 武井明・宮崎健祐・目良和彦・松尾徳大・佐藤譲・原岡陽一・鈴木太郎・平間千絵（2009）：不登校を呈した高機能広汎性発達障害の臨床的検討. 精神医学, 51 (3), 289-294.
- 多田早織・杉山登志郎・西沢めぐ美・辻井正次（1998）：高機能広汎性発達障害の児童・青年に対するいじめの臨床的検討. 小児の精神と神経, 38 (3), 195-204.
- Wiener, J., & Mak, M. (2009): Peer victimization in children with attention-deficit/hyper-activity disorder. *Psychology in the School*, 46 (2), 116-131.
- 谷口清（2011）：学齢期におけるいじめ・対人トラブルと発達障害. 自閉症スペクトラム研究, 10, 19-27.
- 八島美菜子（2002）：攻撃性と発達. 山崎勝之・島井哲志（編）攻撃性の行動科学：発達・教育編. ナカニシヤ出版.